

教職大学院での実習のあり方を考える

橋本 伸也

(城陽市立城陽中学校)

1 はじめに

学校は、人である。日本の学校教育は、人格の完成・全人格的成長を目指す教育である。学校は、個性的でプロフェッショナルな教職員の英知を集め、きらきら輝く生徒（人間を）育成するところである。教職員と生徒、生徒同士、人間として響き合い、豊かな「人間力」を育てるところであると考えている。そんな学校教育の成否を担い、今後の日本の教育をリードする若い人材を育成することは、喫緊の課題である。京都府においても、教員の大量退職・大量採用時代を迎え、質・量の両面から「意欲と情熱」を持った教員を養成・採用することが求められている。そんな状況の中、若手教員育成方策の一つである京都教育大学大学院連合教職実践研究科を中心とした、京都連合教職大学院の成果は、多大なものがある。

2 教職大学院院生の概略

城陽市立城陽中学校では、平成 20 年度から連合教職員大学院連携協力校に委嘱されている。

専任の指導力のあるベテラン教職員を担当に当て、院生実習計画の企画・立案、連絡調整と指導・点検をさせている。また、院生一人一人に、学級担任と教科担当を一般の教員と同じようにさせるようにし（教員免許取得済み）、それぞれ担当の教員をマンツーマンで指導させている。中学校の大きな仕事である部活指導も同様である。

平成 20 年度のⅠ期生 5 人から平成 25 年度のⅥ期生の 3 人まで、21 人が実習している。15 名が終了し（国語 5 人、社会 7 人、数学 4 人、理科 1 人、保健体育 2 人、英語 2 人）、Ⅴ期生（Ⅱ期の学生）3 名、Ⅵ期生（Ⅲ期の学生）3 名が本年度実習中である。また、修了者のうちⅠ期生 2 名（数学科、理科）、Ⅳ期生 1 名（社会）の 3 人が、本校で教員をしている。そして、昨年度修了者 4 名のうち 3 名（国語、社会科、数学科）が京都府で採用され、新規教員として頑張っている。（1 人は大阪府採用）

実習のスケジュールはⅢ期の院生は 9 月の初めから 3 週間、Ⅱ期の院生は 4 月の初めから 7 週間である。

3 実習における院生の学び

早朝、部活動の朝練習から、夕方まで、普通の教員と同じ勤務をし、実習をしている。教科指導や学級指導はもちろん朝学活・給食指導・清掃活動・終学活の実習等である。

さらに、自分の研究テーマと関わっての研究も行っている。本年度院生（3 人とも生徒指導力高度化コース）の研究テーマは、「中学校段階の部活動と生徒指導との関係性における一考察～コーチングの

視点による部活動運営と指導のあり方～」、「子どもの人間関係を育む、教師の支援～構成的グループエンカウンターを中心に～」、「中学生の部活動が持つ問題点とその改善策～退部予測尺度の検討から、その要因を解く～」である。

学校現場での生徒の現状や教員の悩みをつぶさに体験し、学部生時の教育実習生とは違う経験を積み重ね、教育に対する、そして教員になる「覚悟」が形成されつつある。

4 連携協力校となる意義について

若い院生が実習することで、ベテラン教員に次の人材を育成するという意識が強くなり、学校が活性化してくる。また、同じ若手の教員は、ライバルとして切磋琢磨している。学校全体が、「学び続ける教師」の重要性が、様々な触発で具体化してくる。特に、ベテラン教員の積極的なICT活用などは、好例である。

5 今後に向けて

京都府教育委員会の「求められる教員像」は、「児童生徒に対する教育的愛情と、教職に対する使命感・情熱を持っていること。」、「豊かな感性を持ち、明朗かつ健康で、人間的魅力にあふれていること。」、「高い授業力を持ち、児童生徒に確かな学力をつけることができること。」、「社会的良識と自ら学ぶ意欲を持ち、児童生徒や保護者、職場の同僚、地域の人から信頼されること。」、「ふるさと京都への理解と愛情を深めるとともに、国際的な視点に立った教育を推進することができること。」である。教員を志望する学生たちは、このような教員を目標に力をつけてほしい。また、具体的につける力としては、専門的な学問体系を背景にした自分の教科授業力の育成と道德教育、とりわけその要となる「道德の時間」の授業力、部活動の指導力の3つである。

6 終わりに

どんな社会においてもどんな状況におかれても、人は成長し続ける存在であると考え。若い教員は、そのために、自分は「teacher」として「educator」として何をなすべきか、その時々目の前にいる子供たちを見据えながら歩み続けてほしい。私自身、これまで、多くの生徒と出会い、多くの人々に教えられ、多くの保護者や地域の人々を知り、沢山の「感動的なサクセスストーリー」に立ち会ってきた。今、人と人とが直接深く関わり合うことは稀有なことではないだろうかと思える社会である。バーチャルな文化が氾濫し、ネット社会の問題が多発し、無縁社会と呼ばれるほど人間関係の希薄な社会だからこそ、学校で共に学んでいること、地域で共に生きていることを実感できる学校づくりが必要であると考え。そのためにも、教師自身が、社会の変化、学校教育の置かれている状況への認識を深め、社会の急速な変化に対応する力、社会と連携できる力を持たなければならないと思う。だからこそ、教師は「学び続ける」存在であり、子供と共に未来をデザインし、成長する存在であると思う。若い先生の成長と連合教職大学院のますますの充実を期待する。